[新春随筆]

“二足のわらじ”人生

(昭和25年生)

キラメキテラスヘルスケアホスピタル・トータルウェルネスセンター長
鹿児島大学名誉教授(医学部・病理学)
米澤　　傑

「年男」として，私の人生を振り返ってみますと，まさに，『「医学」と「音楽」の“二足のわらじ”人生』で，そのハイライトは以下のようになります。

「医学」では，日本病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」受賞。「高松宮妃癌研究基金学術賞」受賞。各種がんマーカー等の論文の著者世界ランキング第6位（日本人第1位)。

「音楽」では，日本クラシック音楽コンクール声楽部門第1位，ならびに，全部門でのグランプリ。太陽コンコルソ・カンツォーネ・イタリアーナ優勝。鹿児島県芸術文化奨励賞受賞。オペラ「トゥーランドット」の主役・カラフ王子。CDとDVDの発行（写真1）と，CD「誰も寝てはならぬ/米澤 傑 テノール・オペラアリア集」(写真1.「CD/DVDのご案内」の中央）のヒットチャートでの第1位(写真2)。

「医学」のこと

私は，2010年4月28日，東京で開催された第99回日本病理学会総会において，宿題報告講演「ムチン：ヒト癌における臨床病理学的意義と遺伝子発現機構の解明から腫瘍悪性度早期診断システムの構築まで」を行い，高い評価を得ることができ，病理学会で最も名誉ある「日本病理学賞」を受賞し，その内容を，その年の年末には「Mucins in human neoplasms: Clinical pathology, gene expression and diagnostic application」という20頁にわたる英文論文として出版でき，私の30年間にわたる「ムチン研究」に関するライフワークをまとめるこ

写真 1　CD/DVDのご案内

写真 2　TOWER. JP – Ranking1位

とができました。「宿題報告」とは，日本病理学会独特のシステムで，病理学の研究面で著明な業績を挙げている研究者の中から，宿題報告講演担当者が選ばれ，1年半前に正式に発表され，1年半かけて，さらに，研究を発展させてまとまった講演を行い，講演後には，その研究内容を英文総説論文として発表するようにとの「宿題」が課される訳です。

私の研究内容につきましてご興味のお有りの方は，ホームページ「傑作の会」のURL：http://kessaku-no-kai.com/の「スグル先生の聴診器」のコーナーの米澤の病理学的研究で，そのまとめがご覧いただけますし，宿題報告講演の模様は，「記事/対談/談話」のコーナーの2012年8月-鹿児島市医報 第51巻8号の前半に掲載されています。

なお，4月28日の宿題報告講演後，すぐに，東京から京都に移動し，翌日4月29日には，京都会館開館50周年記念「第九演奏会」(指揮：井上道義・京都市交響楽団) で，テノールのソリストを務めるという綱渡りをいたしました。まさに，“二足のわらじ”人生の典型例といえます。

「音楽」のこと

「音楽」の様々な情報も，ホームページ「傑作の会」のURL：http://kessaku-no-kai.com/ にてご覧頂けます。

まったくの趣味で始めた「声楽」ですが，一流の指揮者や歌手との共演，オペラ「トゥーランドット」への主役出演 (写真3)，ヒットチャートの1位を獲得するようなCDのリリース (写真2) へ繋がり，世界一流のイタリア人歌手とのジョイント・リサイタルでは，ニューヨークの音楽記者が『米澤の歌った「清きアイーダ」の最後の高音は，メトロポリタン歌劇場でも聴いたことのない素晴らしいものであった』と世界中に発信してくださるまでになりました。そのような私の音楽活動の広がりは，高名な指揮者の井上道義先生と，国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生との“出会い”と“ご縁”に始まります。

井上道義先生との“出会い”

井上道義先生との“出会い”は，井上先生が，1985年に開催されました「かごしま県民第九演奏会」の指揮をなさったことに始まります。演奏会本番の2カ月ほど前に，井上先生が鹿児島にお越しになり，オーケストラや合唱団のレッスンをなさるとともに，会場の鹿児島県文化センターで，ソリストへもレッスンをしてくださいました。レッスン途中で，私が，テノールソロを歌い始めた途端，井上先生は指揮をやめて，ピョンと舞台から飛び降り，ホールの最後部まで走って行って，腕を組んで，私のソロを聴いていらっしゃいました。おそらく，私の声が「そば鳴り」ではなく「いかに遠くまで響くか」ということをお確かめになっていらしたと想像しています。翌年の春，井上先生からお電話を頂き「井上道義です。今度，NHKで“第九をうたおう”という番組をつくるので，米澤さんにテノールのソリストをお願いしたい」とのことでしたので，喜んでお受けし，東京のNHKに何度か通い，二期会の歌手の方々と一緒にソリストを務めました。

松本美和子先生との“出会い”

NHKの“第九をうたおう”の全国放送をきっかけに，全国各地に「第九」ソリストとして招聘され，ナポリのサン・カルロ歌劇場で開催された「第九のナポリ公演」でのテノールソリストも含め，ベートーヴェン「第九」のソリストは100回を超えます。第九アジア初演の地である私の故郷の徳島県鳴門市で，全国から合唱団員が集って開催される「鳴門の第九」で，1996年に，国際的ソプラノ歌手の松本美和子先生と初めて共演いたしました。松本先生が「1週間後に，イタリアの高名なオペラプロデューサーのジャンフランコ・パスティネ先生が東京にお越しになるから，是非，貴方の声を聴いていただきたいの！」とのことで，パスティネ先生と松本先生にオペラアリアやカンツォーネをお聴きいただきましたところ，お二方揃って「歌手に転向して，イタリアデビューをしなさい」と強力にお薦めくださいましたが，私が医学の道を変える意志がないことを申し上げましたところ，「オペラシーズンの1カ月半だけイタリアで歌い，あとは，医学部で仕事をしていいから」とまでおっしゃってくださったのですが，当時，助教授であった私は「3年後に教授選があり，立候補します。医学部の教授選はかなりの難関ですから・・」と申し上げましたとこ

ろ，お二方ともやっとご了解くださいました。

CD「誰も寝てはならぬ/米澤 傑 テノール・オペラアリア集」に至る道

様々なコンサート活動をしているうちに，私の声楽活動の集大成として，フルオーケストラとの共演での「オペラアリア集」を発行したいと思うようになってきていました。松本先生にご相談を申し上げましたところ，その場で，すぐにイタリアのジャンフランコ・パスティネ先生にお電話をしてくださり，パスティネ先生が，イタリア人指揮者のジョヴァンニ・ディ・ステーファノ氏とブルガリアのソフィア国立歌劇場管弦楽団にご依頼をしてくださいました。2004年のゴールデンウィークにソフィアに入り，3時間，3時間，6時間，3時間と4日間連続で歌い続け，計15時間で15曲の収録をするという“離れ業”で録音を致しました。松本先生は，そのCDのライナーノーツに「四日連続でこれだけの難曲を録音できたテノール歌手はかって誰もいません。米澤さんはこの驚くほかはない離れ業を成し遂げてしまったのです」とお書きくださっています。

全ての収録経費を私一人で負担いたしまして，気の遠くなるほどの費用がかかりましたが，NHKの芸術劇場やラジオ深夜便など沢山のマスコミにお取り挙げ頂き，ヒットチャートの第1位をたびたび獲得するほど良く売れましたので（写真2），かなり早い期間で費用を全て補填することが出来ました。日本人テノール歌手で，フルオーケストラでのオペラアリア集を発行できていますのは，プロ歌手を含めても，私一人のみです。

最近，CD「米澤 傑 テノール ライブ ～オペラアリア・カンツォーネからミュージカル・映画音楽まで～」（写真1.「CD/DVDのご案内」の左側）もリリースいたしました。

CDのヒットチャート第1位獲得

私のCDのヒットには，高名な音楽評論家の故・黒田恭一先生のご推薦と応援も大きいです。黒田先生は，「家庭画報（第47巻第10号，2004年）」で『今，黒田さんが最も注目するオペラ人』の2人をお挙げになり，1人は「サイモン・ラトル + ベルリン・フィル」，そして，もう1人が「米澤 傑」で，「マリオ・デル・モナコの声を持つ医学部教授に出会う」という題目で，黒田先生と私との対談が掲載されています。CDのジャケットには「聴け！これがテノールだ！」というタイトルで「テノールのうたいあげる情熱がいかに純粋で，ひたむきで，熱いかを実感したかったら，米澤傑の声と歌唱に真摯に耳をすますにかぎる。まさにこれがテノールである」とお書きくださっています。

高名な音楽プロデューサーの中野雄先生も，「モーストリー・クラシック」（通巻294号，2021年）に『天は二物を与える・再論 医師・テノール歌手 米澤傑の現在』という記事で，私がイタリアデビューをしていたら「本場で活躍する稀有な邦人テノール」が誕生していたかも知れないが，「米澤は医学部教授への道を選択，日本の医学界は貴重な人材を失わなくて済んだ」とお書きくださっています。

オペラ「トゥーランドット」への出演

2005年，イタリアではサンタマルガリータの夏の音楽祭で，日本では，神奈川県藤沢市民会館で，オペラ「トゥーランドット」の主役・カラフ王子を演じました（写真3，写真1.「CD/DVDのご案内」の右側）。

日本でのオペラ「トゥーランドット」（ベリオ版・日本初演）の公演では，私以外の歌手は全て二期会のトップスターでした。その2年前に，突然，日本音楽界のトップの畑中良輔先生から「2年間あげるから“トゥーランドット”のカラフ王子役の勉強をしなさい。」

写真 3　トゥーランドット舞台写真

とご下命を受けました。早速，ピアノ譜でも厚さが3cmはある「トゥーランドット」全曲の楽譜とCDを購入し，時間があればいつも楽譜を見ながらCDを聴いて，とにかく歌詞とメロディを覚えました。本番の4カ月前くらいからは，演出家のもとでの「舞台稽古」が始まり，土曜日の一番便で藤沢へ行き，1泊2日で「舞台稽古」に参加し，日曜日の最終便で鹿児島に帰り，月曜から金曜までは教授職の仕事を行うという“二重生活”が続き，まさに“ゾッと”するような4カ月間でした。しかし，本番で，見事に，カラフ王子役を歌い演じきり，幾度にもわたる“ブラボーの嵐”のカーテンコールの後，幕が降りた舞台上で，演出の栗山昌良先生から「これで，ひとりのテノールスターの誕生だな！」とおっしゃっていただきました。まさに「長〜い苦しみ，一瞬の喜び」の典型例で，その瞬間があるからこそ，長く苦しい練習にも耐えられるのです。